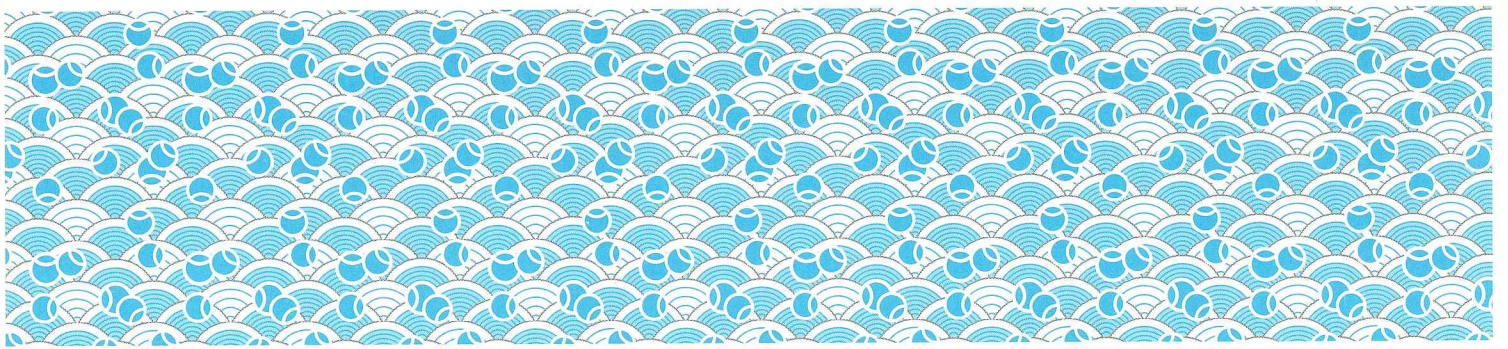


立命館アジア太平洋大学 文部省設置認可申請中

PROGRESS REPORT

[季刊] 立命館アジア太平洋大学プログレス・レポート 1999年 夏 第10号



新しい日本のあるべき姿を見据えた教育を

—立命館アジア太平洋大学に期待する—

社団法人 経済同友会 代表幹事

富士ゼロックス株式会社 代表取締役会長

小林 陽太郎



今後いかなる日本を築いたら良いのか、日本の持つ豊かなポテンシャルを大きく開花させるにはどうすべきなのか。新しい日本を支えるアイデンティティー・哲学・理念が、二十一世紀を目前にした現在、あらためて日本に求められています。この新しい日本を考える上で根幹となるのが教育の問題です。

経済同友会では早くから教育を重要な活動の対象と位置づけ、世界に信頼される日本人を目指して、日本語のみならず外国語によるコミュニケーション能力を高める教育の重要性や、選択の自由を基本とした教育制度改革、個人の学ぶ意欲と能力に応える仕組みづくりなどを提言してきました。教育審議会や大学審議会では、一人ひとりの生きる力、問題探求能力を育むことが答申に盛り込まれています。新しい日本を考える時、私

はこれらに加えて、地域、国、そして世界を対象にした、パブリックマインドとか、有徳・品格といった価値観の重要性を素直に受け入れ、その上で絶えざる自己研鑽が積まれる教育のあり方を探り確立することが大切だと考えています。

「立命館アジア太平洋大学」の開学は、まさにこれらの投げかけと同じ精神に拠るものであり、次代を担う人々の育成に、我々は大いに期待を寄せています。とりわけ、アジアを中心に世界五十カ国から留学生や教員が集まり、外国人が半数を占めるという「マルチカルチュラル・コミュニティ」は非常にユニークで効果が楽しみなコンセプトです。これからの新しい教育環境には、「異質との触れ合い」が非常に重要だと思っています。これまで日本では多くの場合、異質性は排除すべきとされてきました。しかし、教育の場で研究の場で、異質なものと触れ合い、違いを包み込んで認め合いながら切磋琢磨していく、そんな環境が、新しい変化を起こす、将来に向かって新しいものを作り出す、クリエイティブなものを生み出す源となることは間違いありません。また、この学びの場での海外との密接な交流は、日本が今後アジアの国々に理解され、関係を深めていくことへの大きな力になることでしょう。

「立命館アジア太平洋大学」の最初の卒業生が社会に送り出されるのは二〇〇四年です。新しい大学教育を受けた彼らの活躍を心待ちにしつつ、それまでは彼らがフルに力を発揮できるような社会を創出していくことに力を尽くしていきたいと考えています。

建築工事上棟式を挙行

七月十日、大分県別府市に建設中の立命館アジア太平洋大学（以下APU）の建築工事上棟式が、キャンパス建設地内で執り行われました。

式には、平松守彦大分県知事、井上信幸別府市長など地元関係者、設計・監理会社、施工業者関係者の他、立命館からは川本八郎理事長、坂本一副総長（APU学長予定者）など、総勢百五十名が出席しました。

上棟式は、神事、上棟行事、直会（なほらい）の三部構成で行われました。特設会場内の神事では、八幡竈門神社に斎主を務めていただき、玉串奉奠では、川本理事長、平松大分県知事、井上別府市長、坂本APU学長予定者、大分県議会佐々木敏夫副議長、別府市議会三ヶ尻正友議長、大分県経営者協会小野浩会長、APU設置期成同盟会津末武久会長、設計・監理会社、各棟の施工業者が工事の安全を祈って、玉串を神前に供えました。

続いて、管理棟と研究棟の並ぶキャンパスのメイン通路の広場へと場所を移して、上棟行事を行いました。上棟式は、一般的には建物の柱・梁（はり）

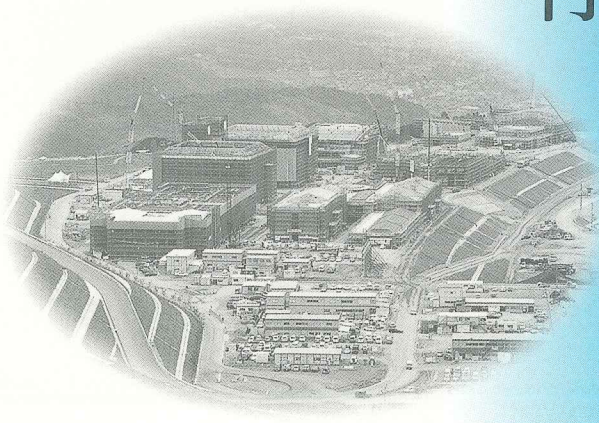
などの組み立てを済ませて棟木を上げる行事です。APUの建築工事では八棟が基本的な建物となりますが、地下一階・地上五階建てとなる管理棟の最後の梁を最上部に取り付けて骨格部分を組み上げることとしました。

上棟行事は、梁となる鉄骨（長さ8m、重さ六三〇kg）の除幕、梁への棟札の取り付け、梁へのボルトとナットの取り付けなどの後、立命館の学園歌が流れる中、クレーンにより管理棟の最上部に持ち上げ取り付けられました。仕掛け火花が点火されると、「祝上棟式！ 大分・別府から世界に発信」の文字が管理棟と研究棟とを結ぶ空中に浮かび上がりました。くす玉を開いて火花の打ち上げで上棟行事を締めくくった後、地元の「豊後紅太鼓」のメンバーによる「祝！太鼓」の演舞が勢い良く披露され華を添えて下さいました。

引き続き、特設会場内での直会へと移り、施主を代表して、川本八郎理事長が「別府湾を見下ろすこのキャンパスで、多くの青年たちが学習、活動して世界に巣立っていくことを想像すると感無量です。この素晴らしい上棟式の開催までに

こぎつけてもらうことができたのも関係者の皆様のおかげです。開学まで八カ月、国内外の大きな期待に応えられるよう全力を尽くしたい」と御礼の挨拶を行いました。

来賓の平松知事からは「誠に若さあふれ将来を見通すような盛大な上棟式がつつがなく執り行われお慶び申し上げます。完成まで安全に工事をすすめていただき、来年の四月の開学を皆様とともに迎えたい」、井上市長からは「来るべき二十一世紀にふさわしい国際観光温泉文化都市を目指す別府市にとってAPUはそのまちづくりの核となる事業として位置づけてきた。地元では開学までのカウン



全体像がわかるまで工事が進んだキャンパス

トダウンボードの設置、国際理解講演会・教室の開催、学生用住宅の着工、国際交流推進協議会など留学生を受け入れるための取り組みが着々と進められている。今後もAPUの開学に向けての地元の状態づくりに邁進していきたい」とのご挨拶をいただきました。

設計・監理会社の株式会社山下設計の柴田寛二代表取締役社長から「長い間の経験でもこれほど心のこもった上棟式はない。キャンパスの骨格はできあがった。別府湾、高崎山を見下ろし、鶴見岳を背にしながら鳥が大きく翼を広げたようにしてキャンパスの各建物が配置されている。今後は細心の注意をはらって細部の完成につなげていきたい」とのご挨拶をいただきました。

施工者を代表して幹事会社の株式会社熊谷組 熊谷太一郎取締役会長より「APUの各施設は実に斬新であり単に教育研究施設にとどまらず国際的施設としてアジア太平洋地域に向けた情報発信の拠点となるもの。大分・別府を第二のふるさととしてアジア太平洋の時代を担う優れた人材を数多く輩出することになるだろう。十二月の竣工に向けて無事故・無災害で最善を尽くしたい」とのご挨拶をいただきました。

乾杯の発声を甲賀光秀立命館専務理事が執り行い祝宴に移りました。

最後に、坂本和一立命館副総長・APU学長予定者が「このキャンパスで立派



設置される棟の名称が書かれ、梁に取り付けられた札

上棟式会場へ向かう一行

工事の安全と順調な進展を祈り、厳かに神事が行われました

な教育を行い、立派な青年を育てて皆様のご期待に添えていきたい。留学生・日本人学生を受け入れる取り組み、地元の皆様との交流などを着実にすすめて、来年四月の開学に向けて全力を尽くしたい」との挨拶を行い、全ての次第を終えました。

APUキャンパスの敷地面積は、四一六、六三〇㎡。造成工事は一九九七年十月から着工し、現在約九割まで進捗しています。

建築工事は一九九八年八月に着工し、現在までに約四割の進捗率となっています。主な建物は、管理棟約八、七〇〇㎡（鉄筋コンクリート五階建て）、研究棟約七、二〇〇㎡（鉄筋コンクリート五階建て）、総合情報センター棟約一三、二〇〇㎡（鉄筋コンクリート三階建て）、教室棟約八、六〇〇㎡（鉄筋コンクリート三階建て）、学生・厚生施設約六、四〇〇㎡（鉄筋コンクリート二階建て）、国際交流センター約二、七〇〇㎡（鉄骨鉄筋コンクリート三階建て）、体育館約三、〇〇〇㎡（鉄筋コンクリート、鉄骨二階建て）、学生寮約一、〇〇〇㎡（鉄筋コンクリート五階建て）の八棟で、合計延べ床面積は約六〇、八〇〇㎡となっています。

これらの建物建築工事は今年の十二月に竣工する予定となっています。



祝宴で、一同乾杯の発声

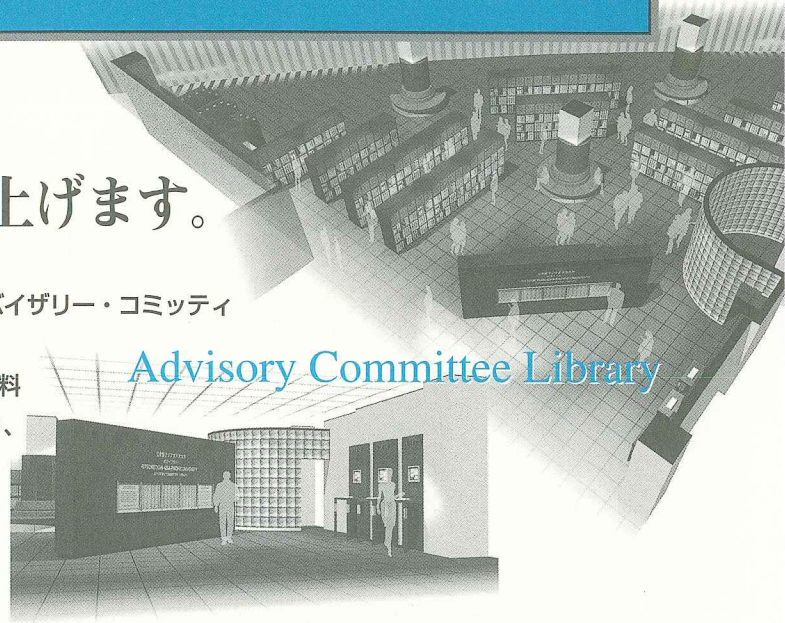
クレーンで空中高く引き上げられた梁

かけ声に合わせて、梁にかけられた綱を曳く出席者の方々

アドバイザー・コミッティ ライブラリー 構想確定

着々のご寄贈が進んでいます。
引き続きご協力をお願い申し上げます。

アドバイザー・コミッティ設立当初から構想をすすめてきたアドバイザー・コミッティライブラリー（ACライブラリー）設置の詳細がこのほどまとめ、6月下旬より、順次幹事様もしくは秘書様に構想の概要のご説明と資料ご寄贈のお願いをさせていただいております。皆様方のご協力により、すでに着々と資料のご寄贈が進んできております。来年4月開学時には、貴重な資料ライブラリーが立命館アジア太平洋大学内に完成することになると関係者一同、期待を膨らませています。引き続き、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。



Advisory Committee Library

先生には、立命館アジア太平洋大学のアドバイザー・コミッティをお務めいただき誠にありがとうございます。

開学を来春に控え、新大学開設準備は、国内外の志ある学生の受け入れ準備、優秀な教授陣体制の確立、キャンパスの建設、豊かな学生生活のための整備など、おかげさまで順調に進捗しております。これも、先生をはじめアドバイザー・コミッティ各位のご理解とご支援の賜物と衷心より厚く御礼申し上げます。

立命館アジア太平洋大学創設を社会的に発表いたしましたのが一九九五年九月。形態・規模・内容においてわが国最初の取り組みとも言える新大学の創設にあたって、私どもは、①現実の世界、アジア太平洋地域の動向・実態をリアルに理解し、認識しておられる方、②二十一世紀に向けて、世界・アジア太平洋地域と日本の関係を将来的にどうあるべきかについて考えておられる方、③実際に日々そのような現実と直面しておられ、それぞれの分野で責任をもって取り組んでおられる方、こういった方々から学ぶ姿勢なくしてはこの大学の成功はありえないと考え、アドバイザー・コミッティの設置をさせていただきました。以来、光栄にも多くの先生方の聲に接する機会を頂戴し、アドバイザー・コミッティとして就任いただくとともに、この構想への賛同という域にはとどまらない的確なご助言、温かい励ましと力強いご支援のお言葉を賜りました。

先生にご就任いただきましたことは、この事業に取り組みます私ども関係者への大きな励みであり誇りでありますとともに、何より立命館アジア太平洋大学への入学をめざす学生諸君への期待

と激励であると考えています。

このたび、私どもは、本大学開設にご協力いただいておりますアドバイザー・コミッティの先生のご著書、先生が責任をもっておられる企業・団体の出版物、また先生もしくは企業・団体について第三者が記述・まとめられたものを、立命館アジア太平洋大学内に永久保存させていただきたく『アドバイザー・コミッティライブラリー』設置について検討を重ねてまいり、このたび構想がまとまりました。

このライブラリーは、学生諸君が、この大学が多くの方々や企業からのご支援により開学されたことを知ることによって社会性を身につけるとともに、アドバイザー・コミッティの先生ご自身そして先生が責任をもってこられた企業および団体の国際的活躍から学ぶことで、新世紀の国際化に貢献するリーダーたる人材の育成を目的とする新大学の理念の一面を具現化するものになると考えています。

立命館アジア太平洋大学開学時には、世界から集い学ぶ学生諸君にとって、このライブラリーが、先達から学ぶ貴重な教材となることと私どもは確信しています。

先生には、誠に恐縮でございますが、意のあるところをご理解賜り、資料をご寄贈下さいますようお願い申し上げます。

末筆ではございますが、先生のますますのご健勝をお祈り申し上げます。

一九九九年六月吉日

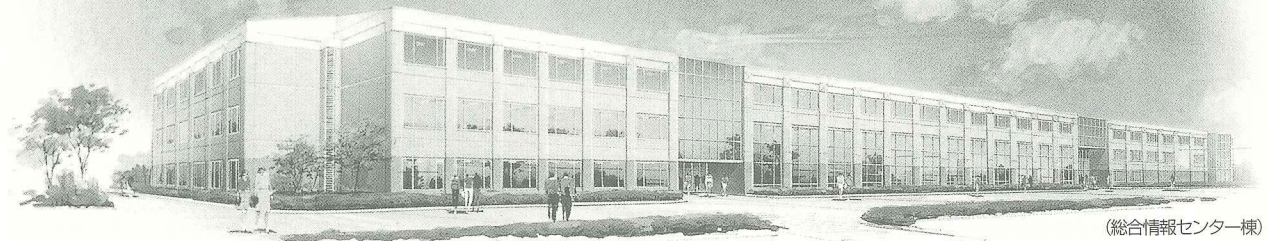
学校法人立命館 理事長 川本八郎

副総長 坂本和一

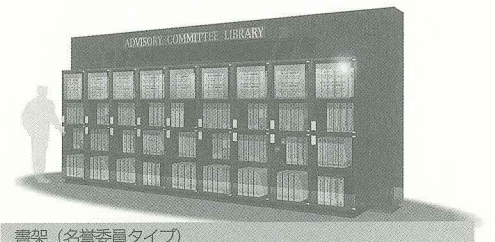
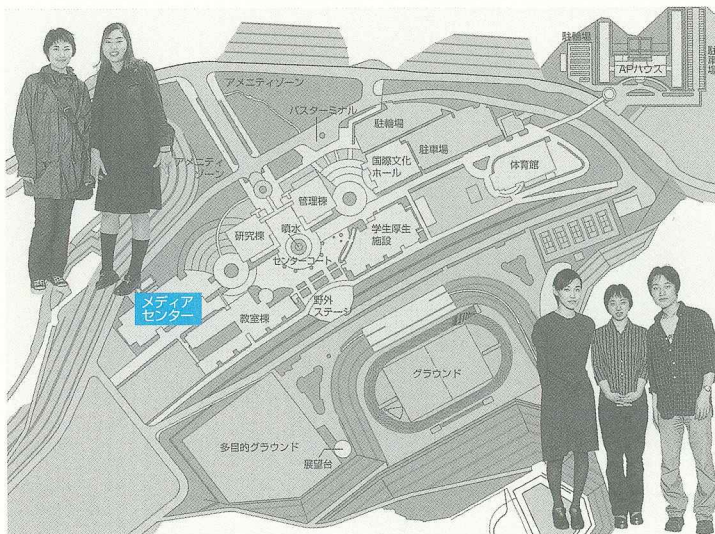
総長 長田豊臣

(立命館アジア太平洋大学学長予定者)

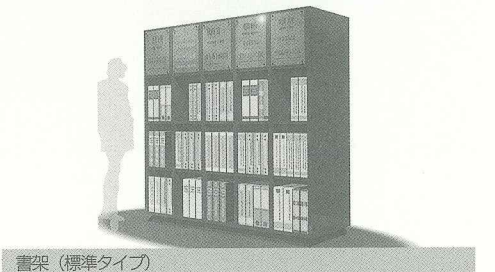
Media Center



(総合情報センター棟)



書架 (名誉委員タイプ)



書架 (標準タイプ)

立命館アジア太平洋大学
 アドバイザリー・コミットティライブラリーへの
 資料ご寄贈に関して

【一】ご寄贈をお願いしたい資料

- ① 先生の著作物 (著書、講演録、対談・鼎談録等)
- ② 先生が所属しておられる企業 (団体) の社史 (団体史) や
 アニュアルレポートをはじめとする主要な出版物
- ③ 第三者が、先生もしくは企業 (団体) について記述、ま
 められたもの
- ④ 先生または企業 (団体) にかかわるビデオ・CD・ROM等

【二】ご寄贈をお願いしたい部数

- 各二冊 (部) ずつお願いできれば幸いです。
- ※ 一冊はアドバイザリー・コミットティライブラリーに配架の
 うえ永久保存とし、一冊は図書館にて閲覧に供させてい
 だきます。

【三】ご寄贈いただきます資料の押受について

- ご準備いただきましたら、寄贈資料リストとともに、左記
 までお送り下さいますようお願い申し上げます。

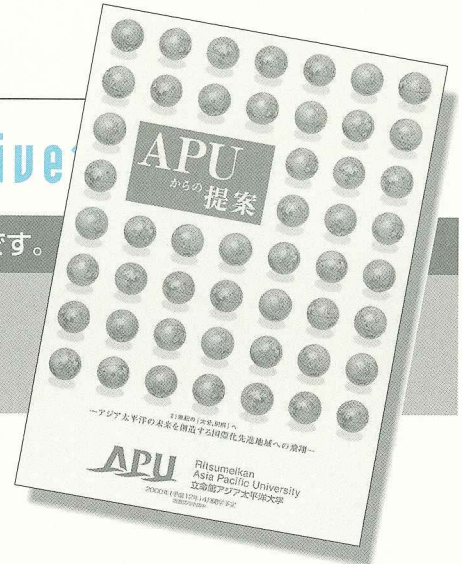
〒六〇三ー八五七七
 京都市北区等持院北町五六一
 学校法人立命館理事長室
 アドバイザリー・コミットティライブラリー係
 TEL 〇七五ー四六五ー八三三六
 FAX 〇七五ー四六五ー八三三五

【四】資料ご寄贈時期の目処

- できますれば八月三十一日 (火) を目処にお願いできれば
 幸いです。
- 勿論その後も随時お受けさせていただきます。

●「地域への貢献」は、APUそしてAPUに学ぶ学生・教職員の信条のひとつです。

「APUからの提案」を発表



地域の国際化と活性化に寄与すること

は立命館アジア太平洋大学（以下APU）の使命のひとつです。また、APUの地元での定着と発展のためには、県民・市民の皆様との新しい協力関係の構築が不可欠といえます。

APUでは、その創設の意義・理念・目標、地域への貢献策などを深くご理解いただき、県民・市民の皆様との支援ネットワークづくりを行う出発点とするために、去る六月六日、「APUからの提案」を発表させていただきました。

『APUからの提案』は、①アジア太平洋時代の人材養成拠点として国際社会を担う「ひとつづくり」、②学術・文化・観光・産業が世界に輝く「まちづくり」、③大学と学生が、大分・別府と世界をつなぐ「えんづくり（ネットワーク）」

の二本柱で構成しています。

現在、各種団体や自治会を対象とした説明会等を開催し、『APUへの提案』に対する県民・市民からの積極的なご意見を募りながら、より強固な信頼・協力関係を築いていく予定です。

です。

この『APUからの提案』を契機に、地域の振興に貢献するとともに、地域から支えられる大学として、APUが発展していく礎を築いていきたいと考えています。

ひとつづくり Human Resources

アジア太平洋時代の人材養成の拠点として、国際社会を担うひとつづくり

■二十一世紀の国際人を養成します

アジア太平洋時代の人材養成の拠点として、世界から、日本全国から集う若者を育てます。大分・別府を「第二のふるさと」として、多くの人材が巣立っていきます。

■子どもたち・青少年の成長をお手伝いします

APUの学生・教職員が、子どもたち・青少年が英語などの言語教育や外国の文化などに親しむ機会を提供し、異文化理解を促進します。

■生涯学習・文化・スポーツ活動の場として、APUの活用機会を広げます

聴講、課外講座受講、APU公開授業など、県民・市民の学習のお手伝いをいたします。また、図書館、スポーツ施設情報システム、アドバイザリー・コミッティライブラリーの県民・市民利用に

ついても最大限お応えいたします。

まちづくり Regional Development

学術・文化・観光・産業が世界に輝くまちづくり

■若いエネルギーで、県民・市民のくらしが輝く「国際学生都市」づくりを協力します

留学生が大分県下の各市町村、別府市の親善大使となり、大分・別府を世界に知らせ、国際観光を推進します。

提案から行動へ、体験から創造へ……多様な学生のダイナミックな取り組みを通じて、「新しい文化を創造し発信する魅力あるまちづくり」を進めます。

新しい国際交流文化を育て、「県民・市民が行ってみたいキャンパス」を創造します。

通訳ボランティアなどで、二〇〇二年ワールドカップの成功に協力します。

■APUの教育研究資源を活かした国際学術観光都市づくりを推進します

産官学連携による共同研究などをおこない、観光・産業・生活の発展に貢献します。

各種団体等の審議会や講演会等へ委員・講師としての参加・協力をおこないます。

国際的学会、国際会議、国内学会、研究会などの誘致・開催に取り組み

Proposal from Ritsumeikan Asia Pacific University Prop



ます。

■ まちと一体となって、インキュベーター（孵卵）空間を創造し、地域産業の担い手を育て、若者が定住するまちづくりへのお手伝いをします

● インターンシップなどを通じて、地域の企業・NPO（非営利組織）・自治体との交流を進めます。

えんづくり Global Network

大学と学生が、大分・別府と世界をつなぐネットワーク

■ アジア太平洋地域に向けた情報発信の拠点として、大分・別府が多様なネットワークを広げることに寄与します

■ 県民・市民が気軽に訪れ、豊かな時間を過ごせる国際交流キャンパスを創造します

● APUで行われる講演会、イベントなどに県民・市民参加をよびかけます。

● 貴重植物ゾーン、別府湾を見下ろす展望台などキャンパスの恵まれた自然と景観を活かした県民・市民との交流を大切にします。

■ 県民・市民とのあたたかい交流を通して、大分・別府を留学生の「第二のふるさと」にします

● 国際交流は心の交流。学生のボランティア活動を奨励します。

● 学生の参加で、地域イベント、まつりの活性化につとめます。

■ 国内外の大学とのネットワークを大分・別府の活性化に活かします

● 海外協定大学・教育機関との交流を促進します。

● 別府市内はもとより、県内の大学・短大との共同イベントの開催、単位互換などの取り組みを広くよびかけます。

● 立命館大学、立命館附属校とAPUとの交流を積極的に推進し、地域の学術・文化・スポーツの振興に貢献します。

立命館アジア太平洋大学 設置期成同盟会総会開催

立命館アジア太平洋大学（以下APU）設置期成同盟会（会長・津末武久別府商工会議所会頭）の平成11年度総会が6月6日、別府市の杉乃井ホテルで開催されました。総会では、今年度も学会や立命館大学のクラブ、サークル、ゼミ合宿の招致活動などを引き続き積極的に行うとともに、来年4月のAPU開学に向けた関連行事への支援を行っていくという内容の事業計画・予算案が確認されました。

総会に引き続き、同ホテルにて、関連行事（主催：APU設置期成同盟会・学校法人立命館）が開催され、教育関係者や市民ら約350人が参加しました。まず津末武久同盟会会長、平松守彦大分県知事、井上信幸別府市長が挨拶を行い、APUによせる期待が述べられました。続いて、坂本和一APU学長予定者が、APUの概要と開学の歴史的・社会的意義を語るとともに、21世紀の大分・別府にむけて、『APUからの提案』を発表し、APUがめざす大分県・別府市への地元貢献策についての考え方を説明しました。

提案発表後、「大学のまちは面白い～大学と地域のイイ関係～」のテーマで、立命館大学びわこ・くさつ

キャンパスのある草津市から、草津商工会議所事務局長の石田隆司氏と元草津市社会教育委員長の黒川善民氏が、市民と大学との交流、地域活性化への影響などについて、APUでも活かせるような貴重な経験談を紹介しました。

最後に、川本八郎立命館理事長が謝辞を述べ、その中で来年5月20日を中心に「立命館創始130周年・学園創立100周年記念式典」「APU開学式典」「立命館大学校友会全国大会」を大分県・別府市で開催することを明らかにしました。川本理事長はまた、大分県民・別府市民・立命館学園の情熱で、ロマンあふれるAPUの創設事業に邁進していくことを参加者の方々に呼びかけると同時に、今回の『APUからの提案』をもとに県民・市民と双方向のやりとりを進め、より内容を具体的に実りあるものにしていきたいと述べ、会を締めくくりました。

当日は、司会進行役として俳優小林綾子さんとラジオパーソナリティ内田瑞紀さん（いずれも立命館大学校友）を迎え、息の合った進行で会を盛り上げていただきました。

関連行事終了後には、高校生や父母の方々を対象にした「APUの魅力を語る説明会」も開かれ、約50人の参加者が熱心に耳を傾けていました。

駐日大使からのメッセージ……2

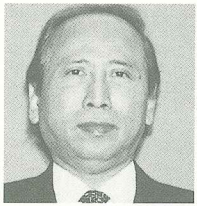
The Messsages from Ambassadors

前回に引き続き、駐日大使の方々からの立命館アジア太平洋大学（以下APU）に寄せるメッセージをご紹介します。今回の三カ国はそれぞれ早くからAPUに対して深くご理解いただき、格別のご協力を下さっており、現地からAPUで学ぶことを切望する青年たちの声も続々と届いています。開学予定の来春もしくは秋期入学となる十月からは、それぞれの国からきた大志ある学生たちがAPUで大いに学んでくれることと確信しています。

The Republic of Indonesia

駐日インドネシア共和国特命全権大使

スマデイ D.M.
ムノルジヨノ
ブロットデイ ニンラット
Soemadi D.M. Protodiningrat



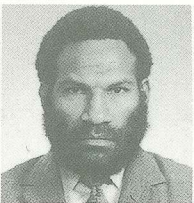
新しい一千年を迎えるにあたって、よりよい世界の構築が強く望まれています。もうすぐ開学される立命館アジア太平洋大学は、新しい時代の世界平和と繁栄の指標となることでしょう。

五十をこえる国々からの留学生が共に学び生活するこの国際的な新大学は、私たちが求める理想の世界を体現するはずで

Papua New Guinea

駐日パプア・ニューギニア特命全権大使

アイワ オルミ
Aiwa Olmi



私は、立命館アジア太平洋大学が学生にとって学びの宝庫であると確信し、パプア・ニューギニアとオセアニア地域のより多くの若者をこの新大学に送り出そうと思っています。

The Socialist Republic of Vietnam

駐日ベトナム社会主義共和国特命全権大使

グエン・クオック・ズン
Nguyen Quoc Dzung



このたび、アジア太平洋地域をリードする人材を育成するため、立命館アジア太平洋大学が開学され

国々が調和的に共存し、お互いに助け合う、そうした世界はさらなる繁栄をもたらします。

立命館アジア太平洋大学はアジア太平洋地域、そして世界に発展をもたらす「地球市民」を育成するでしょう。学生たちは刺激的な高等教育を、実践的な学問・ネットワークによる交流・キャリア開発教育などを通じて身につけるはずで

そこで成長した学生たちは、相互理解・協力・許容に満ちた「地球社会」の構築に大きな役割を果たすでしょう。

私たちは立命館アジア太平洋大学が、アジア太平洋研究の「センター・オブ・エクセレンス」、そして地域的・国際的な協力の新しい基盤となるよう、大きな期待を寄せています。

立命館アジア太平洋大学で学んだ留学生たちは、専門分野だけでなく、日本が世界の一大国として発展した道のりを学びとることでしょう。そして、その知識は彼らの祖国、そしてアジア太平洋地域の発展に大きな役割を果たすことでしょう。

立命館アジア太平洋大学の成功と発展を祈念します。

from Indonesia



昨年からのべ30回にわたり直接現地高等学校で説明会を開催。説明会を通じてAPUへの関心が高い生徒に対して、個別相談会を実施しています。ジャカルタに開設した現地事務所が大いに役立っています。

from Papua New Guinea



1999年4月14日、パプア・ニューギニア政府教育科学スポーツ大臣が本学を来訪され、同国より毎年学生を推薦いただく協定の締結について合意しました。

from Vietnam



ベトナム教育訓練省（文部省）の全面的協力により、学生にアンケート調査を行った結果、多数のAPUへの入学希望者があり、同学生を対象に本年8月下旬に説明会を開催予定です。

二十一世紀には、世界貿易や政治的な協力によって国境あるいは区域というものが、ますますなくなっていくことでしょう。このため、全人類の平和と調和のために、商業・社会・政治構造の共通認識と相互理解がより強く求められます。

立命館アジア太平洋大学は、様々な宗教・文化・政治的な背景をもつ若者たちを一つにつなぐ懸け橋です。ここで学ぶ若者たちは、アジア太平洋地域と彼らの祖国でリーダーとなることでしょう。

パプア・ニューギニア、そしてその他のオセアニア諸国は、アジア諸国と太平洋の工業国をつなぐ中心に位置し、その立地条件は平和で豊かな環境作りをめざす貿易・観光・情報・サービスの発展に非常に有利です。

意欲的な若いリーダーたちは、世界と地域の問題解決にあたって、立命館アジア太平洋大学で学んだことを大いに生かしてくれようと考えています。

ることに、大きな喜びを感じています。日本だけでなく世界中の著名な方々がこの新大学の開学事業に協力を惜しまないのは、この事業がまさに時代の流れにそった教育事業だからでしょう。

急速に進むグローバル化の中で、世界は二十一世紀へ向けて大きな挑戦をする好機を手にしています。現在の国際的な状況は、世界の諸問題を解決できるより賢明なリーダーを必要としています。

立命館アジア太平洋大学が、社会科学教育を通じて二十一世紀のアジア太平洋地域の持続的発展に貢献するよう期待します。日本の教育発展に大きく貢献した立命館大学の経験や日本の豊かな歴史は、大きな参考となるでしょう。私は、様々な国々の教育・研究機関、そして大学間のネットワークを拡大することによって、新大学がアジア太平洋地域そして世界中の人材育成の中心的役割を担うようになると確信しています。

ベトナムでは、教育と人材育成に力をいれています。だからこそ、多くのベトナムの学生が立命館アジア太平洋大学で学ぶ機会に恵まれることに、喜びを感じています。

立命館アジア太平洋大学の成功と発展を祈念します。

APハウス



「APハウス」の概要

APハウスはキャンパス東部に位置し、キャンパス内の他の建物の中で最も間に別府湾を見おろす素晴らしい眺望に加え、緑あふれる自然環境に大変恵まれた場所に立地しています。キャンパスとは県道を隔てた敷地に建てられており、学生が講義に通うことになる教室棟や総合情報センター棟からは歩いて数分の距離に位置しています。

APハウスの建物概要としては、鉄筋鉄骨地上五階建て、延床面積約一万㎡であり、セントラルホールを中心に、両側にウエストホール、イーストホールを配置し、三つの棟がH型に連結されています。

三棟の中央に位置するセントラルホールには、学生や来館者を温かく迎える雰囲気を持つ光りあふれる吹き抜けのロビーがあり、その一

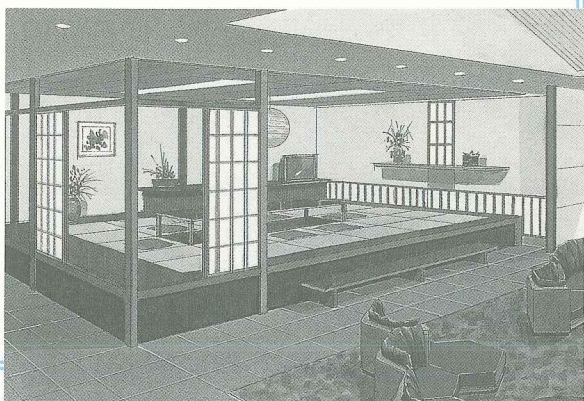
マルチカルチュラル・ コミュニティの象徴 「APハウス」

立命館アジア太平洋大学の学生寮である「APハウス」は、世界中から集まる学生が日常生活を通じて共に成長し、異文化間の相互理解を図る交流居住施設です。四百二十六室の居室（個室）には、新入生の留学生が優先的に入居する予定にしていますので、とりわけ留学生は入学後一年間、APハウスで日本語や日本の生活習慣を学ぶことによって、その後のキャンパス外での生活をスムーズに始めることができます。

角には日本文化を意識した畳敷のラウンジが設けられています。国際通話が可能な公衆電話、共同の浴室、APUキャンパス内とネットワークでつながったパソコンが設置されている情報コーナー、個人毎の郵便ボックスのあるメールコーナー、会議室や管理人室、教職員用宿泊室四室を設けています。

セントラルホールの二階はセミナーハウスになっており、学生・教職員の学習・研究及び交流をサポートする施設として八人が宿泊できる部屋を十室設置しています。セミナーハウスでは、ゼミナールなどの正課利用、学術・文化・スポーツなど様々なサークル活動での利用、APUと立命館大学、附属校、海外協定校との交流など、様々な行事への活用を予定しています。学生用居室（約一三〇㎡）はウエストホール、イーストホールの各階に合計四百二十六室設けられています。学生用居室は一人部屋で、机、

椅子、本棚、照明器具、電話、クローゼット、ベッド、食器棚、冷蔵庫、冷暖房設備、洗面台、給湯、トイレ、靴箱などの基本設備を用意しており、入居後すぐに生活が始められるように配慮しています。各階の中央部分にはそれぞれコインランドリー、シャワーコーナーおよびラウンジ機能を持ったダイニングキッチンが設けてあります。ダイニングキッチンでは料理を通じて活発な交流が日常的に見られることでしょう。



ラウンジ

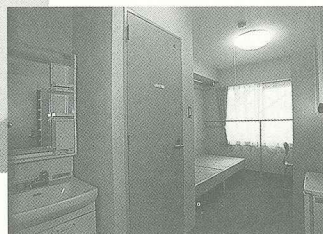
留学生の経済的負担を軽減

APハウスに居住するための諸費用は、入居費二万円と月額二万七千円（住居費二万円、共益費五千円、寝具等レンタル代二千円）を予定しています。日本の住宅事情は留学生にとって厳しい現実であり、また入学時は渡航費や入学手続き費用などの諸費用がかかるため、経済的負担を軽減するためにAPハウスの住居費は低廉な額に設定しています。

APハウスの運営と環境

APハウスの運営はスチューデントオフィスが行ないます。日常的には管理人が二十四時間常駐し、来訪者の入退館チェックや夜間等の緊急時の対応を行ないます。

学生用居室



学習援助としては、APハウスから歩いて数分の総合情報センター棟にあるマルチメディアルームは、深夜まで開室しています。また、APハウス内にも情報コーナーを設置し、レポート作成など日常的にパソコンを使用できる学習環境を整備しています。さらに、キャンパス内の学生厚生施設では大学生協が食堂とショップを営業します。

ムは、深夜まで開室しています。また、APハウス内にも情報コーナーを設置し、レポート作成など日常的にパソコンを使用できる学習環境を整備しています。さらに、キャンパス内の学生厚生施設では大学生協が食堂とショップを営業します。

ムは、深夜まで開室しています。また、APハウス内にも情報コーナーを設置し、レポート作成など日常的にパソコンを使用できる学習環境を整備しています。さらに、キャンパス内の学生厚生施設では大学生協が食堂とショップを営業します。

共同生活のアドバイザー「RA」

APハウスには、レジデント・アシスタント（RA）として各棟各階ごとに複数名の学生が配置され、APハウスに居住する学生の日常生活をサポートします。RAは、入居時のガイ

ダンス、新生活に必要な各種手続のサポート、各階ごとの日常的な交流の企画、APハウスオープンデーなどのAPハウス全体企画・運営、また生活上の諸問題、例えばゴミの分別や出し方、公共交通機関の利用方法をアドバイスするために、自分の居室からラウンジで、APハウスのさまざまな相談に応じます。そして定期的に開催されるAPハウス担当教職員とのミーティングへ出席し、状況報告や情報交換をすることも、緊急時の対応なども行ないます。

開学時は新入生のみで上回生が存在していないため、また居住者の大半が海外から直接入学する留学生となるために、日本での生活アドバイザーとして初年度のRAは国内学生とする予定です。二〇〇一年以降は、APハウスに居住経験のある留学生からもRAを募集します。

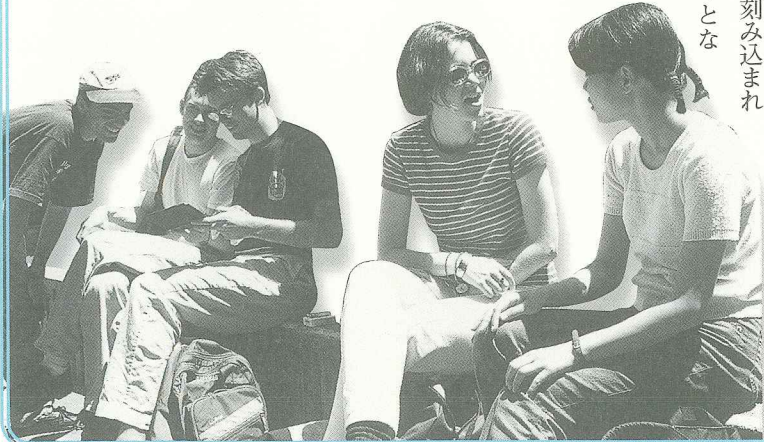
地域との国際交流

APハウスでは「オープンデー」を設け、APハウス見学会や、ダイニングキッチンを利用した各国・地域の料理教室、一日文化・語学教室、ダンスパーティー等を企画し、県民・市民の皆様方とAPハウス居住学生との交流を活発に行なうことを計画しています。またAPUと市内を結ぶバスを利用し、週末には市内のデパートやスーパーマーケットでショッピングをしたり、ボランティアや地域のお祭りに参加したり、子供たちに英語を教えたりするAPハウスの姿が見かけられることでしょう。

このような地域と留学生との交流を通じて、地域における異文化理解の促進にAPハウスも積極的に貢献したいと考えています。

国際相互理解をめざして

APハウスでは、毎年新入生を中心に四百名を超える学生が共同生活を送ることになります。学生が安心して生活を送ることのできる場所「APハウス」は、日常生活を通じて民族・宗教・文化の違いを乗り越えた交流を促進し、多文化・多元的価値を認め合う場としての役割を多に発揮し、APUから巣立つ学生の心に印象深く刻み込まれる一コマとなること
が期待
されてい
ます。



二十一世紀のアジア太平洋と観光



立命館大学
経営学部教授
小方 昌勝
Masakatsu Ogata

前特殊法人国際観光振興会理事。東アジア観光協会副会長、太平洋アジア観光協会理事などを歴任。

アジア太平洋地域の潜在力

数百年以前、世界の経済活動の中心は「地中海」から「大西洋」に移行していきましたが、今やその中心は大西洋から「太平洋」への大きな転換の時にあります。

一九九七年にアジア経済危機が発生するまでは、多くの機関や未来学者たちが口を揃えて「二十一世紀はアジア太平洋の世紀」だと褒めそやしていましたが、中核となるアジアの経済情勢が悪化すると、掌を返すようにアジア太平洋、特にアジアの将来に対する悲観論が続出しました。しかし、現在のアジアは西欧列国の植民地下にあった時とは違って、次に挙げるような他地域を圧する力を有するばかりでなく、世界の期待を担うダイナミックでパワフルな地域に大きく変身をとげており、その潜在力は「二十一世紀の世界にとって不可欠な存在となるでしょう。」

■アジア太平洋は、世界全体のほぼ半分を占める広大な地域を有する。

■アジア太平洋地域の人口は、世界の約三分の二を占める。

(一九九五年) 四十二億人、二〇五〇年) 六十七億人、アジアのみでも約六〇%

■アジア太平洋地域の財・サービス貿易の額は、輸出入とも世界全体の四〇%強を占める。新世紀に入っても順調な成長が予想される。

■アジア太平洋の域内貿易のシェアは約七〇%と高い。相互依存関係の一層の緊密化により、特にアジア地域における経済力向上への寄与が期待できる。

■二十一世紀の社会において中心的存在となる情報・サービス・エレクトロニクス及び各種先端科学技術がアジア太平洋地域の多くの国にしっかりと定着し始めている。

■後発の状態にあったアジア諸国が平均して経済発展を果たし、生活水準・教育水準が他地域のレベルに近づき、有力な中産層を中心とする膨大な消費人口が生まれている。

■国際航空旅行協会の予測では、アジアの航空路線の利用量は年率七%の伸びを示し、二〇一〇年には世界に占めるアジアの比率が五〇%を超える。

このように、地理、人口、経済等の点からみても、この地域は極めて大きな潜在力を有しています。アジアの主要国のいくつかは、すでにアジア経済危機から

の回復への歩みを進めており、「一時的な頓挫」を経て新世紀の初期には世界に最も影響を与える地域としての地位を確立することは間違いないでしょう。

世界観光におけるアジア太平洋地域の位置

世界観光機関(WTO)が発表した「観光二〇二〇ビジョン」によりますと、アジア太平洋地域における観光客到着数は二〇一〇年には米州を抜き、二〇二〇年には欧州(七億一七〇〇万人)に次ぐ四億二六〇〇万人(世界全体の約二七%)に達すると予測されています。二十一世紀には、「観光」がこの地域にとって社会的・経済的に重要な産業として位置づけられることが確実視されています。

アジア太平洋における観光事業の台頭

(一) 経済活動の拡大と生活向上に伴う「旅行」の増大

アジア太平洋地域における経済活動の拡大、所得と生活の向上、産業機構の進歩等が労働時間の短縮と余暇を生み、自由時間を楽しもうとする価値観の変化は余暇活動としての「旅行」を増大させました。また、モーターゼーションの広がり、地上輸送ネットワークの整備及び航空部門の発達(ジェット機、大型航空機等)が短時間での遠距離旅行を可能にさせる一方、技術の発展に伴うコミュニケーション手段の進歩が旅行情報の伝達、観光宣伝、予約・手配等を迅速かつ確実、低廉なものとなりました。

(二) 旅行活動の大衆化と外国旅行の自由化

以前は経費や自由時間の関係から限られた層だけに許されていた観光旅行が、社会環境の改善とともに大衆化され、アジア太平洋地域の多くの人々が外国旅行に出かけるようになりました。特に、日本(一九六四年)、台湾(一九七九年)、韓国(一九八九年)における外国旅行の自由化以後は、アジア諸国が有望な送り出し市場ともなり、世界の観光市場に強いインパクトと期待を与えるようになり

二十一世紀にむけた アジア太平洋観光

二十一世紀にむけたアジア太平洋観光の潮流は、大別して以下の三つの流れと五つのキーワードで特徴づけることができます。

(一) 三つの流れ

① マス・ツーリズムから

オルタナティブ・ツーリズムへ

戦後、植民地の暗い歴史から開放され独立を果たしたアジア太平洋地域の国々は、多額の投資が不要で経済効果が高い「観光事業」に着目し、マス・ツーリズム

ムを積極的に促進してきました。その結果、やがて自然や文化財の損失に直面することになり、一九九〇年代に入ると、世界的な環境問題への取り組みに呼応して「オルタナティブ・ツーリズム（もう一つの観光）」に目が転じられるようになりました。この中には、アジア太平洋地域の豊かな観光資源が最大限に生かせる「エコツーリズム」「アドベンチャー・ツーリズム」「エスニック・ツーリズム」等が含まれており、今後の観光振興の新しい形態として大きな期待が寄せられています。

② 域外交流から域内交流へ

従来、アジア太平洋地域への観光交流の中心は、欧米先進国等の域外からが主流でしたが、この地域の経済活動の

活発化、生活水準・教育水準の向上、価値観の変化、域内の相互依存度の高まり

などを受けて、業務や観光を目的とする旅行が急速に増加し、一九九七年には域内交流が、全体の約七〇％に達する程

になっていました。この傾向は、今後のアジア太平洋地域の発展と成熟性を考えますと、一層高率化するものと思われ

られます。

③ 電子技術の利用拡大

成長から改革に向かっているアジア地域では、電子技術の進歩を受けて、米州やオセアニアにも負けない速さで情報通信分野の整備が進んでいます。また、今後急速に展開が予想される情報ハイウェー、高速通信網等の観光事業への活用も必要となるでしょう。

(二) 五つのキーワード

① 環境

一九九二年の地球環境会議以降、地球温暖化、森林減少、海洋汚染等が地球規模の環境問題として取り上げられるようになり、「持続可能な成長」の概念が導入されました。観光界でも「持続可能な観光」を実現するための「エコツーリズム」等の研究が進み、定義、倫理コード、対処方法などが多数発表されました。自然資源や文化遺産に富むアジア太平洋地域では、今後とも環境保全への関心を活かす分野における旅行需要の拡大が期待されています。

② 情報テクノロジー

インターネットなどのマルチメディアを中心とする情報システムが、観光界にも大きな影響を及ぼしつつあり、情報提供や予約に加え、精算等の多様な活用が急がれています。

③ 華人圏

今後のアジア太平洋地域の発展に不可欠なセグメントとなるのが「華人」の勢力です。華人の数は世界で五七〇〇万人

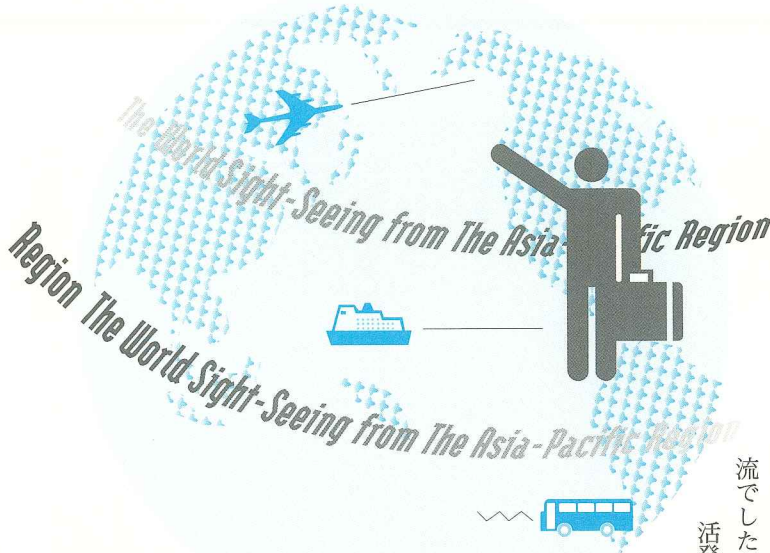
(アジアだけでも五二〇〇万人)に達し、総資産は二千億ドルから三千億ドルと変わっています。アジア主要国の経済活動にも深く関与し、華人ネットワーク自体がすでに一つの巨大な市場を形成していると言えます。

④ 宗教

アジア太平洋地域には、原始・祖先信仰、世界の三大宗教(仏教、イスラム教、キリスト教)、さらには儒教や道教などの数多くの宗教が存在します。宗教の影響は社会生活や思想にまで及んで独特の魅力ある世界の形成を促しますので、広義に考えれば「旅」のエキゾチズムにも通じます。巡礼や宗教文化財・遺産を訪ねる「宗教観光」は、その多様性の故に世界に強い訴求力を発揮することになります。

⑤ 高齢化社会

国連の長期予測によりますと、二〇二五年の世界総人口八十億人のうち六十五歳以上の高齢者は八億人(総人口の一〇％)で、二〇五〇年には十四億人(同一五％)に拡大することです。比較的に自由時間と経済的な余裕を有する高齢者層は、新世紀における有望な旅行マーケット(シニア・ツーリズム)として注目されています。



パプア・ニューギニア 教育大臣 来訪 協定書に調印



協定書に署名するムキ・タラヌビ教育大臣

駐日パプア・ニューギニア大使館とは、これまで、アドバイザリー・コミッテアンバサダーメンバー就任依頼からはじまり学生派遣の協議など、積極的に協力関係を築き上げてきました。特に学生派遣の協定では今年三月に大卒の合意に到り、この四月十四日、同国教育大臣の来日にあたり立命館大学を訪問いただき、最終協議と調印を行うことができました。

最終協議では同国と立命館アジア太平洋大学（APU）の今後の将来展望まで含めた建設的な意見が双方より出されたのち、教育大臣と坂本APU学長予定者の間で協定書の署名交換がとりおこなわれました。

合意内容は、①APU奨学金の受給を受け、二〇〇〇年四月より同国の優秀な学生を毎年一名派遣する、②今後同国政府は日本の文部省に、国費留学生枠をAPUに適用することを強く働きかけ、将来的には毎年複数名を同国政府より派遣する、というものです。

また、教育大臣ご一行は翌日びわこくさつキャンパスの視察を行ない、最先端の教育・研究設備に大きな関心を寄せていました。



ハワイ大学副学長が来訪



右から 長田豊臣 立命館総長、ハワイ大学 ジョイス・ツノダ副学長、坂本和一 立命館アジア太平洋大学学長予定者

五月二十八日に立命館大学の協定校であるハワイ大学のジョイス・ツノダ副学長が本学を来訪され、立命館アジア太平洋大学（APU）との交流内容の具体化に関する協議を行いました。

最初に、立命館アジア太平洋研究センターが主催する国際シンポジウム「アジア太平洋地域におけるグローバル教育に関する国際的ネットワーク」（七月二十四日～二十六日、於：大分県別府市）を契機に、アジア太平洋研究のコンソーシアムを構築することについて協議を行いました。なおシンポジウムには、同大学ハワイ・アジア太平洋学部よりご参加をいただきました。

引き続き、学生交流協定についての協議を行い、当面一～二名程度の交換留学を行うこと、ハワイ大学のジュニア・カレッジ（二年制）の修了者を対象とするAPUへの編入学制度の検討を開始することに合意しました。また、APUの完成年度以降の実施を目標に、四年間で両大学の学位（学士）が取得できる共同学位プログラムなど、新たな学生交流プログラムを将来的な課題として検討していくことに合意しました。

最後に、ハワイ大学が中心となって実施している環太平洋研究や北東アジア経済フォーラムなどについての紹介があり、協議を終了しました。

ハワイ大学は、アジア太平洋研究や日本語教育が活発に行われており、同大学との学生交流や研究交流を通じて、APUの教育・研究を豊富化することが期待されています。

中国・北京大学を公式訪問



右から 遅 惠生 北京大学常務副学長、
坂本和一 立命館アジア太平洋大学学長予定者

六月三十日、北京大学の招聘により、坂本和一副総長（立命館アジア太平洋大学学長予定者）が同大学を公式訪問しました。今回の訪問では、遅 惠生 北京大学常務副学長（筆頭副学長、電子学教授）、国際協力交流部 潘 慶徳副部长（日本担当）と懇談の機会を得て、北京大学と立命館大学との一層の研究交流・人材交流の促進のための協力協定の締結、また二〇〇〇年四月に開学予定の立命館アジア太平洋大学（APU）との交流、交換留学等の諸議題について協議を行い、両大学の協力協定の締結に基本的に合意することができました。

遅 北京大学副学長は、中国政府の二十一世紀教育振興計画を紹介されたうえで、現在北京大学が世界有数の大学をめざして行っている学科や専門分野などの再編成、教員体制の整備などの説明とともにAPUへの期待と協力の申し出がありました。

坂本APU学長予定者からは、APU設立の経緯概要、開学にむけての進捗状況など詳細に説明し、あわせて来年五月二十日に予定しているAPUの開学式典についてご案内しました。

また訪中にあわせて、中国企業連合会、中国企業家協会、駐中国日本大使館の表敬訪問も行いました。

B O O K R E V I E W

ブック・レビュー

『二つのコリア—国際政治の中の朝鮮半島—』

ドン・オーバードーフ著／共同通信社

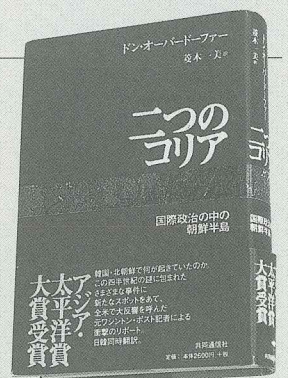
朝鮮半島および北東アジアの第二次世界大戦後の安全保障を軸にした歴史について、膨大なインタビューと公開政府機密資料を駆使して書かれた優れた著作である。二つのコリアが大国の政策変更にも揺れ動かされてきた様子、その中で両国の複雑な関係を見事に描き出している。

朝鮮半島の分断と50年の変遷に大きく関わっている歴代アメリカ政府の外交政策、金日成を主席として仰いてきた北朝鮮、ようやく直接選挙によって文民の大統領を選出するようになった韓国、はじめは北朝鮮と90年代以降は韓国とも深い関係を持つにいたった中国の4カ国、さらに旧ソ連・ロシアと日本を含めた6つの国々の内政と外交をめぐる複雑な関係の分析が臨場感を持ってリアルに描かれている。

本書のハイライトは核開発問題である。韓国はアメリカの防衛公約の信頼性低下から核開発計画を1970年代に立案したことがあり、北朝鮮は社会主義国家の相次ぐ崩壊の中で旧ソ連とも

中国とも関係を悪化させ、生き残りをかけて核開発問題に取り組んできた。これに対して、アメリカ政府は韓国に対しても北朝鮮に対しても超大国として、きわめて厳しい態度を取り、核拡散防止に務めるのである。

著者はプリンストン大学卒業後に朝鮮戦争に米陸軍中尉として従軍し、その後ワシントンポスト紙で活躍し、72～75年には北東アジア特派員として東京に駐在したジャーナリストである。93年にジョンズ・ホプキンス大学客員研究員に就任している。本書は第10回アジア・太平洋賞を受賞しており、すでに社会的評価も高い。朝鮮半島と北東アジアに関心のある方に、是非、一読されることを勧めたい。



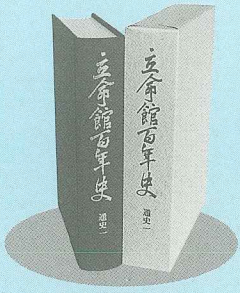
立命館百年史 通史 第一巻刊行 祝賀会を開催

四月二十三日、「立命館百年史 通史第一巻」刊行を記念した祝賀会を開催しました。

祝賀会には、学實・館友・名譽役員をはじめ、すでに故人となられた歴代の理事長・総長のご家族の方々をお招きしました。

今回の通史第一巻は、一九〇〇年に発足し二〇〇〇年に百周年を迎える立命館学園のその前半、四十五年間の学園の歩みを記したものです。

立命館創始百三十年学園創立百周年記念事業の一環として刊行する『立命館百年史』は、八年前から本格的に編纂に取り組んでおり、今後、通史第一巻・三巻ならびに資料編を二巻以上順次刊行する予定です。



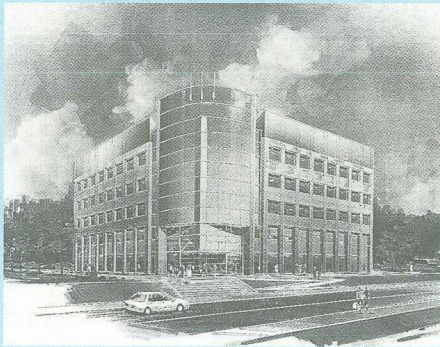
「立命館大学BKCRoom記念館(仮称)」 起工式を挙行

昨年十二月に締結したRoom株式会社との学術交流協定にもとづいて建設の準備を進めてきた「立命館大学BKCRoom記念館(仮称)」の起工式が、六月二日、テクノコンプレクス南側の建設予定地で挙行しました。

式典には、Room

株式会社からは疋田純一常務取締役はじめ関係者、立命館学園からは川本八郎理事長、長田豊臣総長、濱川圭弘副総長(びわこ・くさつキャンパス担当)をはじめ関係者、そして設計施工関係者を含め約五十人が出席しました。

神事のあとの祝宴では、川本理事長は「新しい産官学連携の拠点として社会の要請に応える研究活動を進めたい」と挨拶しました。



BKCRoom記念館(仮称)は、鉄筋コンクリート造の地上五階建、延床面積約六、六〇〇㎡。最先端のマイクロエレクトロニクス研究を通じて、次代の半導体産業を担う人材を養成することをめざします。竣工は来年三月末を予定しています。

立命館大学びわこくさつキャンパス Room記念館(仮称)建設工事 起工式



経営学振興会一周年記念講演会 堀場会長講演会

去る六月五日、経営学振興会第二回総会ならびに一周年記念講演会を開催しました。

経営学振興会は、昨春の経営学部びわこ・くさつキャンパスへの移転を機に、校友のみならず企業経営に携わっておられる方々とともに、新しいビジネスの創造、企業家精神の高揚、企業組織や人材の活性化について知的交流を行うことを目的に発足しました。会ではこの一年、当初の計画に沿って、五回にわたる経営セミナーなどの活動をすすめてきました。

総会終了後、経営学振興会一周年記念講演会として、講師に堀場雅夫氏(堀場製作所会長)をお招きし、「二十一世紀の経営者像」と題した講演をいただきました。会員をはじめ一般参加者や学生も加わり、会場は超満員の盛況となりました。講演では、「今の日本では、最低でも幸福の条件の九〇％は満たされていると言える。つまり、われわれはここから出発している。あとの一〇％とは何か。それは自己実現である。二十一世紀は個の時代である。人間がいかに大切に考えるべきである。それぞれの生き甲斐、特性を生かす経営者、経営が必要だろう。二十一世紀の経営者像とはそういうものだろう」など、熱く語られました。



われわれはここから出発している。あとの一〇％とは何か。それは自己実現である。二十一世紀は個の時代である。人間がいかに大切に考えるべきである。それぞれの生き甲斐、特性を生かす経営者、経営が必要だろう。二十一世紀の経営者像とはそういうものだろう」など、熱く語られました。

BKC新入生歓迎講演会

■講師 西島安則氏

四月十四日、滋賀県にある立命館大学びわこ・くさつキャンパス（BKC）において、一九九九年度BKC新入生歓迎公開講演会が開催されました。「現代学問のすずめー文理融合の今日的意義ー」と題して、西島安則氏（本学理工学部客員教授）を講師に迎え、BKCのめざす文理融合の意義をわかりやすくお話しいただき、学生生活のスタートにふさわしいものとなりました。

「文理融合という新しい分野は、先の見えないカオス。しかし宇宙ではカオスからコスモスが生まれる。与えられた勉強だけではなく、新たな価値体系を創り出して欲しい。経済・経営・理工学部はそれを生み出す三つの渦なのである」というお話しに、集まった九百名の学生は熱心に聞き入りました。



弁理士講座特別企画 特許庁長官特別講演会を 開催

六月四日、びわこ・くさつキャンパスにおいて、エクステンションセンター・理工学部主催の弁理士講座特別講演会を開催しました。講師には昨年六月に特許庁長官に就任された伊佐山健志氏をお招きし、「知的財産権ー二十一世紀を生き残る戦略」と題してご講演いただきました。



この弁理士講座特別講演会は、これまでも特許庁長官をお招きし、行政トップの立場から特許政策についてご講演をいただいております。今年度で七回目を迎えました。今回の講演では、歴史的観点から見た特許の重要性や特許との関わりのなかでの知的サービス業の方向性などについてお話いただき、在学生をはじめ地元の工業会会員や弁理士など約三百八十名が参加しました。

法曹特別講演会

■久保利秀明 弁護士

四月十二日、立命館大学京都・衣笠キャンパスにおいて、久保利秀明弁護士を講師に迎え、法曹特別講演会を開催しました。この講演会は、法学部とエクステンションセンターの共催により、今春入学の新入生を対象とし「二十一世紀社会とコンプライアンス（違法）精神ー法曹をめざす諸君におくるメッセージ」と題して行われたものです。

久保利弁護士は、日経ビジネス誌の人気ランキング三年連続トップに輝く企業法務分野での第一人者であり、さまざまな企業をめぐる具体的な事件を取り上げながら、企業に遵守を迫っていくべき法律家の役割をリアルに語って下さいました。



ワイツゼツカー 前独大統領 講演会を開催

四月八日、毎日新聞社主催・立命館大学協賛による「ワイツゼツカー前独大統領講演会とシンポジウム」が開催されました。

今回は「若者と平和」と題してご講演いただいたのち、本学学生代表・教職員・大学院学生代表との対話が行われました。

氏は講演で、「我々戦争を体験した世代は若い世代に対して沈黙を守りすぎていた。平和というものは政治的抑圧のためだけに脅かされているのではないことを、しっかりと伝えなければならぬ。市民も平和を政治家だけに求めるのではなく、自分自身の問題として捉え行動することが大事なのだ。私達は平和に対してもっとありがたみを持たなければいけない。自由を維持することに皆さんは責任があるのです」と平和に対する考えを述べられました。

参加した学生にとっては、平和について改めて考えることの出来た意義深い一日となりました。





発行：学校法人立命館
〒603-8577京都市北区等持院北町56-1
TEL.075-465-8366 (理事長室)

